「あの4年」への憧憬

60代後半で再結成したザ・タイガース

ストーリー

酒場で待つジュリー

1面からつづく

ぶらりと立ち寄った居酒屋。コの字になったカウンターの端で、1人の男が静かに杯を傾けている。どこかで見たような。まさかジュリー？　いや、そんなはずは……。目をごしごしこすったサラリーマンが何人いたことだろう。

5年ほど前のことだ。東京・目黒の東急目由が丘駅に近い繁華街に店を構える「金田」。沢田研二さん(65)＝ジュリー、ボーカル＝が足を運ぶようになったのは、友人がくれた本に紹介されていたからだ。ある日、主人がそっと耳打ちした。

「ときどき瞳さんもいらっしゃいますよ」。「頭の中にパッと光がともった。この運を逃しちゃいけないと」。ザ・タイガース結成時のメンバーの一人、瞳みのるさん(67)＝ピー、ドラムス＝と会えることを期待し、ライブや舞台の稽古の合間を縫って通い続けた。

店の戸が開く音がしても決して振り返らなかった。「酒飲みの作法だから。それに店の人たちはピーを知っている。彼らの反応を見れば分かる」

ピーと最後に会ったのは1971年1月24日、武道館での解散コンサートを終えた晩だった。瞳さんは、東京・銀座の料理屋での「最後のうたげ」がお開きになると店の近くに止めていたレンタルトラックに乗り込んだ。他のメンバーがぼうぜんと見守るなか、そのまま実家のある京都に旅立った。

瞳さんは振り返る。「芸能界が僕らをコマのように動かすことに、不信感を拭えなかった。『皆の顔も見納め。もう一生会わない』と決めていた」。69年に加橋かつみさん(65)＝トッポ、ギター＝が脱退したショックも尾を引いていたという。その後、慶応大を卒業し、高校の国語・中国語教師になった。

沢田さんの記憶。「武道館で泣いたピーを見て、正直、泣くなら続けろと思った」。「長いお別れ」になるとは想像もしなかった。

「ピーが『芸能界の人間とは会わない』と言っているのは人づてに聞いていた。だから学校を訪ねるわけにはいかない。携帯電話の番号も知らない。偶然に頼るしかなかった。気の長い話だけど、居酒屋で『おうっ』と声を掛け合う、その辺からやり直したい気持ちもあった」

同じ頃、沢田さんは瞳さんへのメッセージとして、岸部一徳さん(66)＝サリー、ベース▽森本太郎さん(67)＝タロー、ギター＝と共作した「Long Good-by」をアルバムに収めた。「僕には君の決断がまぶしかったよ」「一度酒でも飲まないか」と語りかける3番の歌詞は沢田さんが書いた。「もう生きてる世界が違うからアカンやろなと思いつつも、いちるの望みを抱いていた」

2008年秋、テレビで沢田さんらが「Long Good-by」を歌ったことを瞳さんは同僚から聞いた。学校を訪ねたタイガースの元マネジャー、中井国二さん(故人)から沢田さんが「金田」で待っていることも教えられた。瞳さんは思い起こす。「そうまでしてくれるなら、一杯やりながらわだかまりを解くのもいいかなと思った」

中井さんの仲立ちでこの年暮れ、東京・渋谷の日本料理屋で沢田さん、岸部さん、森本さんと瞳さんは向き合った。37年ぶりだった。森本さんは会った途端に号泣した。「ピーの顔を見たら、楽しかった昔を思い出しちゃって。会えないと諦めていたからね。タイガースは僕の青春時代そのものだったし……」。酌み交わすうち自然と、「また一緒にやろう」という話になった。

翌年2月、瞳さんは新しいドラムスティックを買った。「タイガースは否定しようとしても否定できない存在」。10年には教職を辞めて、音楽活動を再開した。

「ピーの復帰」というハードルをクリアした沢田さん。あとは「オリジナルメンバーによる完全復活」に向け突き進むだけのはずだった。

ところが沢田さんは加橋さんとステージの方向性を巡って衝突してしまう。2人は多くを語らないが、沢田さんが旧知のコンサート主催者の協力を得たいと主張したのに対し、加橋さんは企業を巻き込んだ大規模なツアーを志向し「かなり激しいやりとりがあった」（関係者）という。

11年9月から12年1月にかけての沢田さんのライブツアーに岸部さん、森本さん、瞳さんはゲストとして参加したが、ステージに加橋さんの姿はなかった。「タイガースの最大の魅力はトッポの高音、ジュリーの中音、サリーの低音のハーモニー」（森本さん）。沢田さん自身、「やっぱり、かつみがいないと。他のメンバーが彼のパートを歌っても声が前に出ていかない。タイガースのハーモニーじゃなくなる」と物足りなさを感じていた。

「感情のすれ違いから失礼なことを言ってしまったのはわびる。だから会ってくれないか」。12年2月。沢田さんは何度も加橋さんの留守番電話に吹き込み、同じ内容のメールも送った。ようやく会えたとき、「どうすれば『ザ・タイガース』がやれるのか、考えてほしい」と訴えた。君がいないタイガースなんて、との思いを込めて。数日後、返事があった。

「昔のような友達に戻ろう」

ようやく5人がそろった。

「仲たがいをしても元に戻せる。僕らは大人になった」（沢田さん）

加橋さんは69年、「アイドル路線に傾き過ぎて、メッセージが伝えられない」とグループを飛び出した。反戦平和の時代だった。今、こう語る。「僕はタイガースへの思いを音で表現する。それが一番ストレートに伝わるから。今回の再結成ステージは『最初で最後』の気持ちで臨む」

11月中旬。東京都大田区のスタジオで、再結成コンサートに向け入念にリハーサルが繰り返されていた。

メンバーの一部は「今回のツアーにはサポートバンドを入れるはず」と思っていた。演奏やコーラスを補う存在だから、大舞台では助けになる。しかし沢田さんは「あえて入れない」とメンバーに話した。「大丈夫。僕らは昔からそうやってきた。自分で奏でてこそ、それぞれの人生が音に出る。『これからどうするねん』という不安も含めて音色になる。僕はそう信じてる」

解散後、岸部さんは俳優に転じ、演技者としてキャリアを積んだ。森本さんは自らのバンドを率いる一方、プロデューサーとしても活躍。加橋さんも着実に音楽活動を継続してきた。「違う人生を歩いてきた僕らだから、大人のタイガースの魅力が出せる。現役で歌い続ける沢田だからこそ、タイガースの価値を再発見したのだと思う」（岸部さん）

リハーサル2日目の休憩時間。沢田さん、岸部さん、森本さんが談笑する傍らで、瞳さんはあるパートのリズムに納得がいかないのか、スティックを離さず練習を続けていた。加橋さんもギターのチューニングに没頭していた。どこかぎこちない空気も感じられた。

加橋さんは気にするふうもなかった。

「普通のバンドはメンバーの力が足し算されるだけだが、僕らは、互いに反発し合う力がかけ算になる。タイガースの強みはそこにある」

「ここのタイミングは……」「いや、こう入っていった方が……」。メンバー同士が演奏について熱心に意見を交わしているとき、沢田さんはあまり口を挟まない。常に一歩引いているように見えた。

「僕は遅れてやってきた人間だから」

ザ・タイガースの母体は京都の遊び仲間4人が65年に結成したバンド「サリーとプレイボーイズ」。メンバーがよく訪れるダンスホールで歌っていたのが沢田さんだった。

沢田さんを加え「ファニーズ」と改称しデビューへの切符をつかんだ。上京後の67年、「ザ・タイガース」として「僕のマリー」でデビュー。少女たちを夢中にさせ、グループサウンズ（GS）の頂点に立った。長髪にエレキギターは「不良」の代名詞とされ、コンサート会場で先生が生徒を追い返す事態も起きた。存在が社会現象となった。

「皆に誘ってもらったから今の僕がある。感謝とともに、後から加わった人間がこの業界でいいとこ取りをしてしまったという感じが拭えない。友達同士でやっていたバンドに割り込んだようなね。年齢も一番下だし。もちろん僕にも『一生懸命やった結果』という自負はあるから、気兼ねとは違うんだけどね」

「5人が集まれる奇跡」

71年1月の解散後、沢田さんはGSのスターが集合したPYG（ピッグ）に参加した。しかし商業的には失敗に終わり、その年の11月にソロになった。「タイガースという巨大な山を超える。それが最大の目標だった」（沢田さん）

「勝手にしやがれ」（77年）で日本レコード大賞を獲得し、その他の音楽賞も総ナメにした。化粧や奇抜なファッションで茶の間の度肝を抜いた。「昔から、ほめられていいことなんか一つもないと思っていた。『あんなやつ、どこがいいねん』とか『へたくそ』とか、そういう批判に発奮した。僕を嫌いな人を好きにさせるのは無理でも、せめて振り向かせることができたら『よっしゃあ！』と」

「ソロのジュリー」と「タイガースのジュリー」。レコードの売り上げでは比較にならないほど「ソロ」に軍配が上がるが、沢田さんの心は満たされなかった。

「あの輝いた4年間に勝る経験は、ソロでは絶対にできないと思った」。居酒屋でピーを待ち続けたのも、トッポに謝罪の留守電を入れたのも「あの4年間」への憧憬からだった。

タイガース再結成を加速させたものの一つが「年齢」であるのは間違いない。10月19日、大宮ソニックシティ（さいたま市）でのソロライブ。総立ちの観客の前で沢田さんはステージを走る、走る。アップテンポの歌で小刻みなステップを披露すると「ジュリー！」の歓声は最高潮に達した。一方、トークでは老いを逆手に取り「最近、体がだるい。更年期障害でしょうか……」。客席がドッとわく。アンコールを歌い終え、別れの決めぜりふを放つ。「ジジイでした」

ここ数年はメッセージソングも発信している。憲法9条を守るべきだと主張する「我が朝状」（08年）、東日本大震災と福島第1原発事故を歌った曲を集めたミニアルバム「3月8日の雲」（12年）。「伝わる伝わらないより、祈りなんです。僕は僕のやり方をするしかない」。「年を取ると丸くなる」といわれるが、ますますエッジをきかせる。

来年1月に予定しているコンサートのタイトルは「ひとりぼっちのバラード」。ニューアルバムも制作する。ライフワークの一つと位置付ける音楽劇は来春、「悪名」というタイトルで主演として舞台に立つ。

ザ・タイガース再結成は走り続けることをやめない「ジジイのジュリー」の現時点での集大成なのかもしれない。「60代後半にもなった5人が集まれるなんて奇跡。だったら、やらんといかんやろう。そして『やってよかった、めでたしめでたし』で終わりたいやんか」。沢田さんは心をのぞかせる時、京都弁になる。

3日の東京・日本武道館。コンサートはクライマックスにさしかかっていた。ジュリーが右手の人さし指と親指でかたどった「L」のサインを高々と掲げ、ゆっくりと左右に振る。額の汗に照明が当たり輝いている。

♪時はあまりにも／はやく過ぎゆく……ラヴ・ラヴ・ラヴ／愛こそすべて

スローバラードの「ラヴ・ラヴ・ラヴ」。歌声に合わせ観客席を埋めた約1万3000人がLサインを揺らす。会場は一つになった。

全28曲、2時間余りの舞台だった。「しんどかった」。ステージから下りた瞳さんが漏らす。沢田さんが左手の親指をぐいっと立て、笑いながら言った。「いきなり大きいところ（武道館）やから熱気に押されたと思うけど、大丈夫や」

着替えを済ませた沢田さんと、楽屋でもう一度、向き合った。「44年前は歓声ばかりで誰も歌を聴いていなかった。でも、今日は皆、楽しんでくれたんじゃないかな。僕らに必要なのはうまさじゃない。音楽好きの仲間が集まって演奏してるって感覚が大切なんだ」

再結成コンサート全8公演は長崎や大阪を回り、27日の東京ドームで千秋楽を迎える。

「ああ、あと7回になってしまったね」

久しぶりの再会――。リハーサル中から高揚しているようだった。左から沢田研二さん、瞳みのるさん、加橋かつみさん、森本太郎さん、岸部一徳さん＝東京都大田区内のスタジオで、西本勝撮影

上緊張の一瞬。幕が上がるその直前まで準備に余念がなかった＝東京・日本武道館で12月3日、須賀川理撮影
下ザ・タイガースの登場は事件だった。森本さん（左下）、沢田さん（中央）、瞳さん(左上)、岸部さん(右から2人目)、加橋さん(右端)＝1967年撮影、提供写真

「ソロのジュリー」はザ・タイガースのそれとは違う表情を見せる＝東京・渋谷公会堂で11月4日、須賀川理撮影

今回の S の取材は

取材打ち合わせ中の瀬尾記者

瀬尾思義（東京夕刊編集部）　1991年入社。宇都宮、京都支局、大阪経済部、東京経済部で勤務。東日本大震災の発生時は仙台支局次長だった。2012年4月から夕刊編集部に所属し、政治や社会問題などを取材している。